

茨木市立南中学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和5年 10 月作成

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

（領域ごと）

①言葉の特徴や使い方に関する事項	概ね良好な結果であった
②情報の扱い方に関する事項	概ね良好な結果であった
③我が国の言語文化に関する事項	やや課題が残る結果であった
④話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
③書くこと	概ね良好な結果であった
④読むこと	概ね良好な結果であった

（問題形式）

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	やや課題が残る結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

（無解答率） 概ね良好な結果であった

（その他）

もっとも正答率の低かった設問は、4一の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題であった。4二の古文中の語句に対応する言葉を現代語で書く設問も、それに次いで正答率が低かった。もっとも無解答率の高かった設問は4三現代語の竹取物語を古典と比較して工夫された点を書く設問であった。

分析

全体を通して正答率が高かったのは、①文章を読んで自分の知識等と結びつけて書く、②レポートの形式に沿って文章を書き換える、③文章中の工夫を考える、の3つである。本文の内容をもとにして思考力を問われる設問であった。その中でも、記述式の問題が特に正答率が高かった。根拠を挙げて意見を述べる作文の指導や、授業で穴埋めを減らし記述を中心にした課題に取り組んできた成果であると考えられる。

一方で、漢字の書きや歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す設問では平均を下回るなど、基礎的な知識不足が課題であると言える。ここに関しては、一度授業で扱うのみにとどまらず、ペアや班を用いたグループ学習や、定期的に復習を行うことで知識の定着を図ってきたい。

今後も思考力や記述の力を伸ばしていく一方で、基本的な知識の定着、またその活用をする力を向上させるよう課題を設定していく必要がある。

(領域ごと)

①数と式	概ね良好な結果であった
②図形	やや課題の残る結果であった
③関数	概ね良好な結果であった
④データの活用	課題が残る結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	やや課題の残る結果であった
③記述式	やや課題の残る結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

領域の①～④、問題形式の①～③、そして無解答率、すべての項目において全国平均を下回る結果となった。

領域では特に「データの活用」において、正答率・無解答率ともに大幅に下回った。また、問題形式では「記述式」の設問すべてで全国平均を下回った。全国平均と比べ正答率が上回った設問は、2番と8番(2)で、15問中2問だった。

分析

無解答率を中心にしてみると、全国平均を上回った設問は、1番と6番(1)のみであり、多くの設問で解答のきっかけをつかむことができなかった。この主な要因としては、「知識不足」「読解力の未熟さ」の2つが考えられる。無解答率においては、平成29年度以降高い数値で推移していることから、現状大きな課題と言える。

具体的に設問で見ると、“自然数”や“累積度数”など、その言葉が何を意味していて、どう求めればいいのかかわからずミスや無解答につながったと思われる。また、問題形式が短答式で比較的解答しやすい設問であっても、問題文が長文となっていた7番(1)、8番(1)などで正答率を下げていることから、文章を読む力、文章から必要な情報を見つけ出し処理する力が十分ではないこともうかがえる。さらに記述式では、「読解力の未熟さ」との相互関係により、自分の考えや意見を、筋道を立てて説明する力に課題がある。

今年度の特徴としては、6番(2)で最初の記述式の設問が出題されており、ここでは正答率が低かったものの無解答率では全国平均とそう差はない結果となっている。しかし、それ以降の設問で無解答率の差が大きく増えている。これは、問題後半の長文や難易度の高い設問に対して、設問に取り組む前から早々に諦めてしまった生徒も少なくなかったのではないかと推測する。

これまで計算力を中心に学習を進め、問題の本質に触れることがあまりなかったことが上記課題の要因のひとつであると考え。今後、言葉や公式など知識の定着を図りつつ、ペア学習やグループ学習を積極的に取り入れ、自分の意見を相手に伝えたり、相手の意見を受け止めたりする機会を増やしていくことが必要である。また、身近なことがらと結びつく題材や知識を活用する問題を授業で多く取り上げることで、長文や難問に直面しても、解答のきっかけをつかみ、果敢にチャレンジしていける力をつけていきたい。

英語

(領域ごと)

- | | |
|-------|-------------|
| ①聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ②読むこと | 概ね良好な結果であった |
| ③書くこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

最も正答率の低かった問題は4と9(2)、正確に内容する問題や文法の正確さをみとる問題
最も正答率の高かった問題は1(1)(2)と8、リスニングの概要把握問題や文章を読んで「概要をとらえる問題」
無解答率の高かった問題は9(2)、10、自分の考えを整理し、まとまりのある文章を書くなどの記述問題

分析

正答率の高かった問題は読む、聞くとともに概要をとらえる問題であった。授業で取り組んできた概要をとらえる練習の積み重ねが成果となって表れたと思われる。また、多少わからないところがあっても推測して英文を聞いたり読むことに慣れてきているのではと考えられる。

その反面、正答率の低い問題は正確さが問われる問題で、特に文法事項の正確さを問う問題では低かった。多くの文法事項を学ぶ中で、既習事項を振り返る活動や、様々な文法事項を使って表現する活動が不足していると考えられるため、今後の授業づくりに反映させていきたい。

無解答率の高い問題は、難易度の高い作文問題であった。一方で生徒質問紙のまとまりのある文章を書く問題に関する質問では、「書く内容もその内容を表現する英語も思い浮かんだ」と答える割合が全国平均の倍となっている。このことから、学力や興味意欲の二極化が進んでいると思われる。また、表現の活動は授業の随所に取り入れているが、グループやペアでの活動が多く、個人で力を定着させる活動が弱いと考えられるため、授業の活動を個人の学習につなげる活動を設定する必要がある。

「話すこと」調査については、概ね良好な結果であった。しかし、無解答率が高く、「話すこと」に関して授業の活動を充実させていく必要がある。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

平成29年度より、3教科平均正答率の下降傾向が続いていたが、昨年度は上昇した。

今年度の3教科平均正答率は大きく下降した。国語、数学は全国平均より下回ったが、英語は全国平均を上回り、概ね良好な結果であった。

正答率と無解答率を比較すると、正答率のわりに無解答率が高くなっている。今後の授業づくりを見直す一つの指標といえる。3教科において、思考・判断・表現の観点が全国と比べて下回る傾向が多い。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

平成29年度から、学力高位層が減少し、低位層が増加していたが、昨年度、学力高位層が増加し、低位層が減少した。今年度は低位層の割合が高位層の割合を大きく上回る結果となった。

今後も南中スタンダード(授業時の約束)の徹底が必要である。また、授業での「問い」を研究していく。学習に向き合えない生徒に、あきらめず授業に参加させるような対応や取組みを継続する必要がある。それが正答率の向上や無解答率の減少につながるのではないかと考える。

〇●取組み●〇

学力向上に関する取組み

今年度のテーマ … 「I・T・Oを意識した授業づくり ～聴いて・考えて・つながる～」

I : Input T : Think O : Output

一人も見捨てない授業を意識し、以下の努力目標を掲げて取組みを行っている。

- ① 様々な課題のある子どもたちがいきいきと参加できる授業
- ② 班・グループを生かし、学び合う学習集団づくり
- ③ 生徒会と各種委員会、クラスの班長会が連携した授業規律の取組み
- ④ 家庭と連携した学習習慣をつける取組み

具体的な取組み

- ① 授業づくり
今年度から「授業時の約束」「学びのステップ I・T・O」を掲げ、全教科・全授業で一致して生徒が「わかった、できた」と感じることでできる授業づくりをめざして、全教師が同じ方向性で取組みを進めている。南中ブロックスタンダードをもとにして作成した「授業時の約束」を共有し、スクリーニングを通して授業改善に努めている。また、授業のユニバーサルデザイン化を意識した授業づくりに取り組んでいる。
- ② 授業研究会・自主学習会の実施
年2回の校内授業研・研修会を実施している。また、自主研修会を複数回実施している。
- ③ 学力実態の把握
全国学力・学習状況調査の分析や、校務支援システムで定期テストの分析を行っている。教科会等で授業改善について話し合い、実践している。
- ④ 学習会の実施
各学年、テスト前学習会、長期休暇学習会を実施している。
- ⑤ 家庭との連携
年度初めの家庭訪問時に、「学習の仕方」の冊子を配布し、学習の仕方や評価について説明している。また、「テスト計画・振り返り表」で生徒の学習状況を家庭と交流している。
- ⑥ スクールサポーターの活用
スクールサポーターと学習支援者の協力のもと、支援を必要とする生徒のサポートを行っている。ヒントなどを書いた補助教材の作成も行っている。
- ⑦ 小中連携の推進・地域連携
中学校ブロック連携コーディネーターを中心に、月1回の連携会議や行事交流、年2回の合同研修を行っている。
いきいきスクールでは、中学校の数学科教員が週に1回、小学校で授業参観や数学の授業を行っている。
- ⑧ 少人数加配の効果的な運用
英語科・数学科で少人数授業や習熟度別授業を行っている。
- ⑨ 朝読書
学級文庫を設置し、全学年で朝読書を行っている。